ガーナを通して見て、考えた。“私にできることは、なんだろう。”

氏名	会田　理恵
学校名	山形県立霞城学園高等学校
担当教科名	商業
実践教科名	LHR／総合的な学習の時間
時間数	4／6時間
対象生徒（学年）	Ⅲ部　　2年次
対象人数	24名

関連する学習指導要領の内容と文言

○ホームルーム活動（LHR）

2．活動内容

(2) 個人及び社会の一員としての在り方生き方、健康や安全に関すること

ア　個人及び社会の一員としての在り方生き方に関すること

> 青年期の悩みや課題とその解決、自己および他者の個性の理解と尊重、社会生活における役割の自覚と自己責任、男女相互の理解と協力、コミュニケーション能力の育成と人間関係の確立、ボランティア活動の意義の理解、国際理解と国際交流など

○総合的な学習の時間

4．総合的な学習の時間のねらい

(2) 学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的に取り組む態度を育て、自己のあり方生き方を考えることができるようにすること。

ア　国際理解、情報、環境、福祉・健康などの横断的・総合的な課題についての学習活動

ウ　自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動

Ⅰ．実践の目的

本校は今年度創立11周年を迎えた、定時制の単位制、普通科の高校である。山形駅から直結している霞城セントラルビルの中にあるため交通の便も良く、県内広域から生徒達が通学してきている。主に午前中に学ぶⅠ部･午後に学ぶⅡ部･そして夜に学ぶⅢ部の多部制になっている。そのため定時制高校ではあるが、自分の所属する他部の授業も履修することで３年での卒業が可能になっている。

私が担任をしているⅢ部２年次の生徒達にも、さまざまな問題を抱えて入学してきた者が多い。全体的に他の高校に通う生徒たちよりも経験値が低く、多くが集団での活動を苦手としている。国際理解教育に関しては、全く受けたことのない生徒がほとんどである。特に英語を大の苦手とする生徒の割合が高いため、彼らの中には「英語が話せない＝海外には行かない→外国や海外での出来事には興味がない」という

生徒も少なからずいた。そのためこの度の実践では、

1．ガーナを知ってもらうこと
2．ガーナを通して世界へ目を向け、世界の抱えている問題や実態を知り、これまでより視野を広げてもらうこと
3．学習の中で自分自身を振り返り、他との共生についても考えるきっかけとなること

を目的に取り組んだ。少しでも興味関心を引き出すため、映像の視聴やクイズ形式での学習などを取り入れ、総合的な学習の時間での実践はグループ活動とした。また、実践ごとの生徒の感想は全体で共有し、さまざまな意見を紹介するように心がけた。

Ⅱ．授業の構成案

時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
1限目（LHR） テーマ：「ガーナを知ろう」 ねらい：ガーナがどんな国なのかを知る。	1．Ghanaって新聞を用いて、ガーナの衣食住や歴史・カカオについて理解する。	・ガーナ国旗 ・アフリカの地図 ・Ghanaって新聞 資料1 ・マラリアチェックキット ・他、ガーナで収集した教材
2限目（LHR） テーマ：「水」 ねらい：ガーナや日本・世界の水事情を知る。	1．フォトランゲージ。 2．「地球サポーター」の視聴。 3．ガーナの水事情をGhanaって新聞を用いて理解する。 4．「地球調査隊」の視聴。	・ギニアウォームの写真 ・「地球サポーター」TV東京 ・Ghanaって新聞 資料2 ・ガーナのペットボトル ・ピュアウオーターの袋 ・JICAのHP「地球調査隊」
3・4限目 （総合的な学習の時間） テーマ：「ガーナとチョコレート」 ねらい：ガーナとチョコレートについての理解を深める。	1．ガーナとチョコレートについてクイズ形式で理解を深める。 （夏休み前に国際理解講座を受けたクラスの生徒3名が一部の問題作成と進行をおこなった）	・ガーナのCD ・ガーナの写真 ・ガーナとチョコレートに関するクイズ問題 ・白地図 ・得点表
5限目（LHR） テーマ：「児童労働1」 ねらい：児童労働の実態を知る。	1．3・4限目で行ったチョコレートに関するクイズの内容の復習。 2．HPや本からの資料をもとに、児童労働について理解を深める。	・ACEのHP ・「子どもたちのアフリカ」岩波新書 ・ふぇあうぃんずのHP ・「ぼくは13歳　職業、兵士。」合同出版
6限目（LHR） テーマ：「児童労働2」 ねらい：児童労働の実態について理解を深める。	1．前回の感想を全員で共有する。 2．「世界がもし100人の村だったら」を視聴。 3．「あいのり」の視聴。	・Ghanaって新聞 ・「世界がもし100人の村だったら」フジテレビ ・「あいのり」フジテレビ

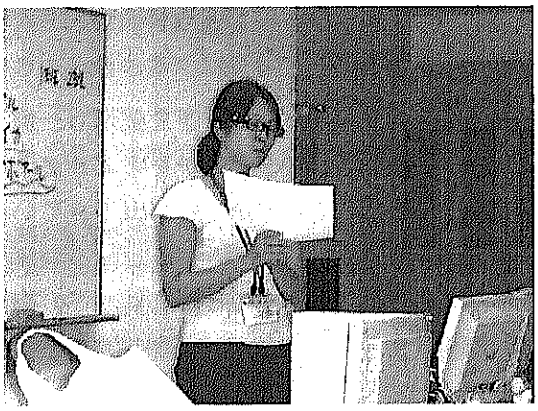
時限・テーマ・ねらい	方法・内容	使用教材
7・8限目 （総合的な学習の時間） テーマ：**「異なる食文化を体験しよう」** ねらい：異なる食文化を実際に体験してみる。	1．ガーナの食事やマナーを紹介する。 2．「地球サポーター」を視聴し、パームオイルについて知識を得る。 3．FUFUの調理。 4．FUFUとパームオイルを使ったスープを試食する。	・ガーナの食事・食事法のパワーポイント ・「地球サポーター」TV東京 ・パームオイル ・FUFU（インスタント）
9・10限目 （総合的な学習の時間） テーマ：**「私にできることは、なんだろう。」** ねらい：児童労働をなくすために自分たちのできることを考える。	1．フェアトレードについて知る。 2．カカオ産業の児童労働をなくすためにできることをグループごとにランキング。資料3 3．グループごとの発表。 4．JICA事業について知る。 5．「私にできることは、なんだろう」の抜粋を音読リレー。	・ロッテガーナチョコレート ・フェアトレードチョコレート ・ランキングシート ・JICAリーフレット ・「私にできることは、なんだろう」地球市民村編／アスコム

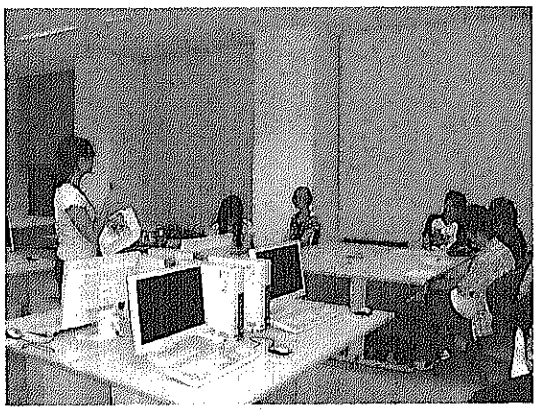
その他の校内活動

○「国際理解講座」～身近なところから世界へ目を向けよう～（総合的な学習の時間４時間）

・チョコレートに関するワークショップ

・JICAの出前講座に来てもらい、青年海外協力隊での経験についてのお話





○「Ghanaって新聞」をクラスで発行　22号

・１～３号（ガーナの基本情報）は夏休み前に発行

・ほとんどの新聞はSHR時に配布し、５分ほどの説明を加えながらみんなで読んだ

○霞城祭（学校祭）の「国際理解のつどい」の中で

・教師海外研修報告会「AKWAABA」　資料4

・「Ghanaって新聞」の展示　資料5

・ガーナで撮った写真の展示

○児童労働ビデオ鑑賞会と座談会（２回実施）

・「失われた子供たち【スカベンジャー】」を視聴

・「働かされる子どもたち」NHKを視聴

・ビデオ視聴後、ビデオについての感想を話し合う

○職員研修会　「教師海外研修に参加して」

Ⅲ．授業の詳細

1時限目　「ガーナを知ろう」

【日　時】平成20年10月９日(木)　９校時

【目　標】ガーナの概要を知り、学習に関心を持ってもらう。

【内　容】これからの学習の導入にもなるため、できるだけ興味を持ってもらうために「Ghanaって新聞」資料１以外にも、現地で集めることのできた教材をできるだけ多く提示して、ガーナについての概要を説明した。

【生徒の感想】

・同じ国の中で多数の言語があることが不思議に思いました。日本では「方言」という形で話し方が違うことはありますが、文字は同じなので。

・夏によく蚊に刺されるが、ガーナの人にとっては命にかかわる大変なことにもなる。保健教育が未熟なため間違った情報を信じている人が多いと知り、改めて情報の大切さを感じた。

・奴隷貿易は映画やテレビの中のことだけだと思っていた。

・ガーナはチョコレートというイメージしかなく、他は考えたこともありませんでした。今回の機会がなければ一生知ることもなかったと思います。「DOOR OF NO RETURN」印象に残る言葉でした。

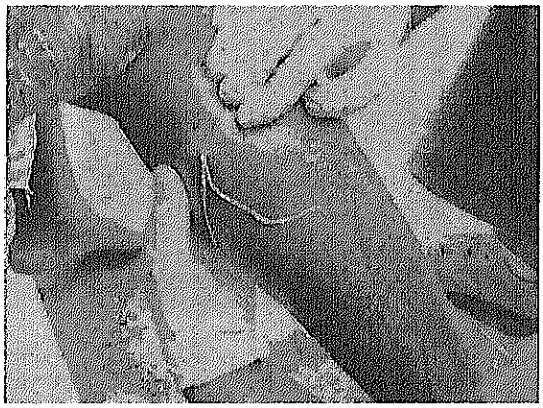
・外国についてもっと知りたいと思った。

2時限目　「水」

【日　時】平成20年10月16日(木)　９校時

【目　標】ガーナの水事情を知るとともに、世界の水事情を知る。またそれらを通していかに水が大事なものであるか考え、自分の生活を振り返る。

【内　容】



①左の写真≪JICAホームページより≫を提示し、何をしているところか、何故そうなったのかを考えさせ、思ったことを発表。生徒達は体の中から虫が出てきていることは気付いても、その原因が水であることはわからなかった。(今回のテーマが「水」であることは、この後発表。)

②ガーナの水事情を「Ghanaって新聞」などを用いて説明。資料２

③「地球サポーター」を視聴したあと、水が原因で亡くなる子どもの数や日本人の使う水の量、バーチャルウオーターなどについてクイズ形式で質問しながら、水について知ってもらう。

④JICAホームページ「ぼくら地球調査隊」"水は命のもと。水がほしい！"を見る。クイズの内容と重なるところもあったため、再度水に関する問題を認識し、自分の生活を振り返る。

⑤まとめ

【生徒の感想】

・日本に住んでいるとあまり、というか全く感じたことがなかったけど、世界の水不足の状況がこんなにひどいと思わなかった。

・水と世界各国とはいろいろな繋がりがあることを知った。

・地球のほとんどの水が生活水として使えないのに驚いた。水は大事だと思った。

・水は当たり前にあるものじゃないんだなーと改めて思いました。こういう映像を見ないと自分の環境

の良さに気付けないのは情けないと思います。

・水があるだけで人々の生活が楽になるのがわかった。

・日本の水道水でもまずいと言ってコンビニで買って飲んでいるのは、本当に贅沢だと思った。寄生虫の心配もなく、水汲みに行く必要もない。これ以上贅沢なことはないんじゃないかと思った。

３・４時限目　「ガーナとチョコレート」

【日　時】平成20年10月24日㈮　７・８校時

【目　標】これまで「Ghanaって新聞」などを通して得たガーナに関する知識をクイズ形式で確認することで、ガーナに関する理解を深める。また彼らにとって身近であり、ガーナに関わりの深いチョコレートについてもクイズ形式で知識を得ることで、次回から学習する児童労働の導入とする。

【内　容】

ガーナとチョコレートについてクイズ。ガーナやカカオに関するクイズは、これまで発行された「Ghanaって新聞」から出題。ガーナについての作問とクイズの進行は生徒が行った。グループ対抗にし、ほとんどの問題の解答は４択にしたため答えやすく、活発な活動となった。

※クイズの問題の抜粋

○ガーナはどこにあるか？（白地図使用）

○ガーナの現地語のひとつであるチュイ語で「AKWAABA」とはどんな意味か？

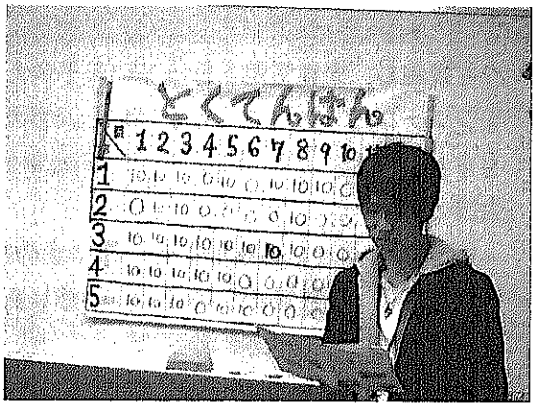
○カカオの花から実になるまでどれくらいの時間がかかるか？

○カカオの実の付き方は？

○カカオを最も多く生産している国は？

○チョコレートを一番多く消費している国は？

○日本人の一年間の一人あたりの消費量は？　　など



≪授業の様子≫

５時限目　「児童労働１」

【日　時】平成20年10月30日㈭　９校時

【目　標】児童労働とは何なのか、児童労働についてのデータや資料・事例などから理解する。

【内　容】

①３・４時限目で実施した、「ガーナとチョコレート」クイズの、チョコレートとカカオに関する復習を行った。そして、「ガーナの子どもたちはチョコレートを食べたことがないのは本当か？」という私がガーナへ行く前に受けた生徒達からの質問と、「“奴隷”は現代では本当にないと言えるのか」と、問いかける。生徒は、チョコレートを食べたことのないガーナの子どもたちもいるが、奴隷のような制度は今はないと思うというのが多数であった。

②ふぇあうぃんずのホームページより「子供の奴隷が作るチョコレート」を読みあげ、その後「子どもたちのアフリカ」の抜粋を配布、各自黙読。

③ACEのホームページ「１分でわかる児童労働ミニ講座」を利用し、児童労働について説明。
児童労働の「最悪の形態」として少年兵について説明。「ぼくは13歳　職業、兵士。」に出てくるチャールズくん（ウガンダ）の事例を読み上げる。

④まとめ

【生徒の感想】

・世の中はすごく不公平だと思った。国と国の不平等の差がありすぎて残酷すぎます。

・児童労働は気持ちが沈むような内容だった。人を人とも思わないような扱いを受けている子どもたちが今も世界中にいると思うと悲しい。そう考えてみると、何か力になりたいと思う。

・子どもの命が金の道具になっているという事実が本当にあるっていうのは、本当に残念だと思う。普段、私が面倒くさいと思う学校に本気で行きたいと思う子どもがいる。生まれた場所が違うというだけで、こんなにも違いがある。小さな体で銃を持つ。どうして何も悪いことをしていない子どもたちが救われないのか。自分にできることは、そういう事実があることをちゃんと知ることから始まると思う。

6時限目　「児童労働２」

【日　時】平成20年11月13日㈭　９校時

【目　標】前時に学習した内容をもとに、実際に児童労働を行っている子供たちの生活を知ることで児童労働への理解を深めるとともに、自分自身を振り返る。

【内　容】

①「Ghanaって新聞」17号を用い、前時の学習の振り返りを行うとともに、感想を全体で共有した。

②フジテレビ「世界がもし100人の村だったら４」のガーナのカカオ農園で働く兄弟の児童労働の様子を視聴し、児童労働を行っている子供たちについて理解を深める。

③フジテレビ「あいのり」を視聴し、カカオ農家が先進国から搾取されている現状を知る。

④まとめ

【生徒の感想】

・自分が働くっていうことと、ガーナの子どもたちが働くっていうのは、同じ「働く」という言葉を使っていてもなんか別物のように感じた。

・“先進国”に搾取される“途上国”という図式はずっと変わらないと思った。

・11歳の子どもが、さらに幼い弟のために涙を流している映像は印象的でした。

・映像を見て心が痛んだ。コフィの幸せを考える兄はすごいと思う。学校に行きたいけれど行けない、先の見えない労働をすることはすごく辛いことだと思う。いつもこの授業で、自分に何ができるだろうと考えるけど、先進国の私たちも原因をつくっていることが悲しいことだと思った。たぶん、どの国も自分たちのことしか考えていないからこうなるのだと思う。

7・8時限目　「異なる食文化を体験しよう」

【日　時】平成20年11月27日㈭　11・12校時

【目　標】ガーナの食文化を理解、体験してみる。

【内　容】

①パワーポイントを用いて、ガーナの食事やマナーなどを説明。また、多くのガーナ料理にはパームオイルが使われていることにも触れる。

②「地球サポーター」でパームオイル作りの様子を視聴する。

③FUFUの調理法（インスタント）の確認。

④実際にグループごとに調理。さまざまな感想を言いながら生徒達は調理を進めていた。特に、匂いに関する

感想が多く聞かれた。

⑤FUFUとパームオイルを使ったスープ（数名の生徒達が早めに登校し調理しておいたもの）と一緒に試食する。

⑥まとめ

後日、「Ghanaって新聞」を配布した際に、感想を共有するだけでなく世界の食糧・飢餓の状況についても触れた。

≪試食の様子≫

【生徒の感想】

・はっきり言っておいしくない。でも、ガーナの人たちにとっては、大切な食料なんだと思う。

・FUFUは匂いが独特でした。

・他国の食文化に目を向けてみることも、その国を理解することにつながるのだと思う。今日の体験はとても良かった。

・パームオイルを使ったスープが美味しかった。FUFUも美味かった。スムーズに調理が進んで良かった。触感がモチモチしていて、すいとんみたいだという感想もあった。スープも右手で食べてみた。

9・10時限目「私にできることは、なんだろう。」

【日　時】平成20年12月15日(月)　11・12校時

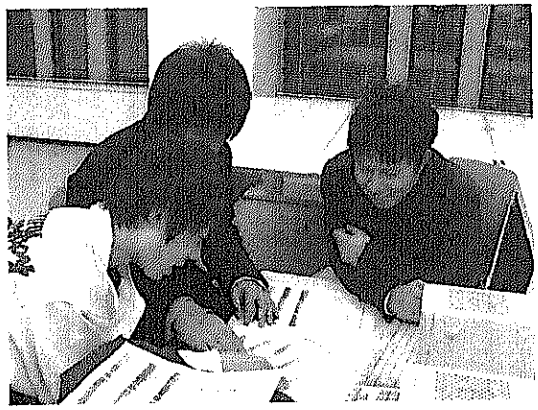
【目　標】児童労働をなくすために自分たちにできることを考える。
これまでの学習を振り返るとともに、自分自身を振り返る。

【内　容】

①これまでどのような学習を行ってきたのか、また、どのような意見・感想が出たのか振り返る。

②ロッテガーナチョコレート（60g・100円）とフェアトレードチョコレート（今回はPeople Treeのものを使用、50g・290円）を提示し、値段の差はどこからくるのか考えさせる。

③グループごとに１枚ずつフェアトレードチョコレートを配布。フェアトレードとは何か、グループごとにチョコレートの包装紙を開けて内側にある説明を読む。それに、補足説明を加える。生徒の中から「つまりは、寄付なの？」という質問が出たので、あくまでも商品の代価であり、労働に対する適正な支払いだということを理解させる。



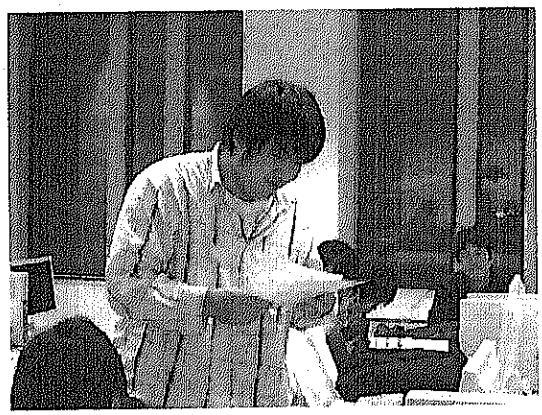
④カカオ産業の児童労働をなくすために自分にできることのランキングをグループごとに行う。９つでランキングを行うが、８つ提示し、ひとつはグループごとに考えたうえで行う。資料３

⑤グループごとにランキングの発表。自分たちにできることの９つめに何を考えたのかと、ランキングの一番に何を挙げたのか、またその理由を発表してもらう。

グループごとに考えたことは、

・現地へ行く→実際に自分の目でみればさらに関心が高まるし、現状を伝えられる。

・児童労働によってできた可能性のあるチョコレート



は買わない。

また、ランキングのトップは、Aが二班、E・F・Iが一班ずつとなった。Aの理由は

・よく知ることで友達にも話をし、仲間を増やすことができる

・事実を知ることで、できることがあるかもしれない　　といったものであった。

⑥開発途上国を支援している団体や世界の問題に目を向けている団体が、自分たちが参加できるような身近なところにも多くあることをふれた上で、その一つの例としてJICA山形のスタッフより、JICAの活動・青年海外協力隊について説明をしてもらう。

⑦これまでの実践に関係のある部分を、本「私にできることは、なんだろう。」より抜粋し、クラス全員で音読リレーを行う。

⑧まとめ

【生徒の感想】

・今日のテーマはシンプルだけど難しかった。今までいろいろ考えてきて、今日の授業の内容はすごく理解できた。

・フェアトレードというものを初めて知りました。チョコの値段の違いを『使用材料が高い』と思っていたのですが、もっと深い理由があった。値段は高いけどそれが平等であり、あるべき値段だと思う。

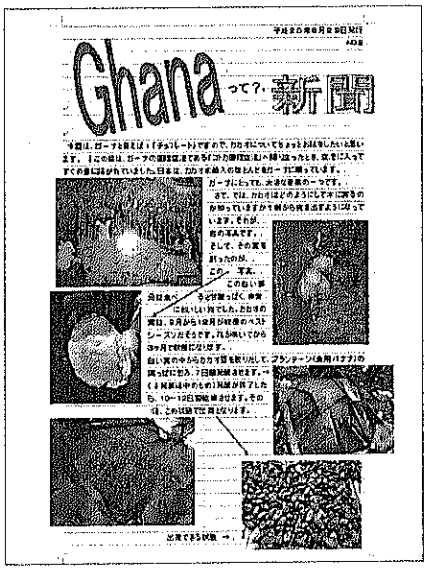
・今、私がマイペースに暮らしている間にも、飢餓で空腹のまま亡くなる人がいることを知った。自分が本やインターネットなどを使って、知識をつけていくことが大切なのではないかという思いが出てきた。

・今まで世界の現状を知る授業をして、とても世界が広くも感じたし、狭くも感じた。自分が当たり前のように生活していたことが、他の国の人にとっては夢のような生活なんだろうと思った。幸い自分は貧しい国の人たちに手を差し伸べられる立場にある。私にできることは、なんだろう。これからも考えていきたい。

・私は、どんな小さなことでもその国のためになるならば実行したいと思う。今まで学習してきた中で、苦しむ子どもたちを見てはじめは感じなかった異国への助けたいという気持ちが湧いてきた。自分たちのことだけを考えるのが当たり前だと思っていたが、間違いだったと今は感じる。国や文化が違っても分かり合えると思う。

資料1　NO.8　「カカオ」

NO.14「奴隷貿易」



資料2　NO.6「水」

資料３　カカオ産業の児童労働をなくすためにできることのランキング

A．図書館やインターネットなどで「児童労働」について調べたり、知識をつける。
B．日本政府にもっと「児童労働」の問題に取り組んで欲しいと署名を集め、その声を日本政府に届ける。
C．多くの人に「児童労働」の問題を、新聞やテレビを通して訴えかける。
D．「児童労働」をなくすためのイベントに参加する。
E．「児童労働」によって作られていない「フェアトレード」のチョコを作って欲しいと、企業に手紙を送る。
F．普通のチョコより高くても、「児童労働」で作られていない「フェアトレード」のチョコを買う。
G．「児童労働」をなくすために活動している団体を支援する（募金・寄付／ボランティアをする）。
H．カカオ産業の「児童労働」について、身近にいる人たちと話す。
I．グループごとに考える。

優先順位【高】

1位

2位　2位

3位　3位　3位

4位　4位

5位

優先順位【低】

※ACE開発教育教材「おいしいチョコレートの真実」より

資料４　10月８日　山形新聞

世界に視野広げて

鶴城学園高文化祭　教諭、海外体験語る

山形市の鶴城学園高（柴）「鶴城祭」がこの週末、「富士見校舎」の文化祭「開かれ国際協力機構（JICA）の教師海外研修で八月にガーナを訪れた同校の金田理恵教諭（34）が体験談を披露した＝写真。

生徒に海外に向けて視野を広げてもらおうと、同校が文化祭で初めて企画した。金田教諭は、バナナを練って餅状にした主食「フーフー」や、油分が少なく粉っぽいチョコレートなどを紹介しながら、現地の暮らしや教育などを説明。「ガーナは貧しいというイメージがあったが、実際は何でもあってびっくりした。皆さんも世界に目を向けて、自分ができることから挑戦してほしい」と呼び掛けた。生徒ら約二十人が耳を傾けた。

資料５　「Ghanaって新聞」の掲示

Ⅳ．実践の成果

実践そのものは浅く薄っぺらなものであったかもしれないが、生徒たちは、世界の抱えている問題を知り私が想像していた以上のことを考え、感じてくれたように思う。また、私自身も毎回悩みながらの実践であったが、生徒と同じように様々な事を考え、気づくことのできた時間となった。全ての実践が終了した後のアンケートにも「視野が広がった」「自分にできることもあるのだと気づいた」「他の人たちの気持ちを深く考えることができた」「世界を知ることで自分を見つめ直すことができた」等の感想が見られ、多くの課題や反省は残るものの実践の目的は概ね達成されたと思う。

Ⅴ．課題

広い視野を持ってもらいたい、世界に目を向けてもらいたい、と思っていたが、結果的に実践で扱った分野に偏りが出てしまった。また、できる限りの情報を提示したつもりではあるが、「提示しただけ」になってしまったものもある。時間のない中での実践であったため、生徒自身が調べ学習により自分自身で知識を得ていく活動や、自分の考えをじっくりまとめ、全体の場で意見交換を行う時間も確保できなかったからこそ、展開にはもっと工夫が必要であった。

また、今回の実践では、世界の抱えている問題の一端は知ることができたが、それについて探求し、自分なりに解決の道を考え、何か行動を起こすところまでは至っていない。知って終わりではなく、どのように次に繋げていくのかは大きな課題である。

Ⅵ．出典（利用教材・参考教材）

・「子どもたちのアフリカ」石　弘之 著　岩波書店
・「ぼくは13歳　職業、兵士」鬼丸昌也・小川真吾 著　合同出版
・「私にできることは、なんだろう。」地球市民村編／アスコム
・JICAホームページ
・ACEホームページ
・ふぇあうぃんずホームページ
・「地球サポーター」TV東京
・「世界がもし100人の村だったら」フジテレビ
・「あいのり」フジテレビ
・ACE開発教育教材「おいしいチョコレートの真実」

世界を感じて、足元を見つめなおす

氏名	大堤　直人
学校名	秋田県　秋田市立秋田商業高等学校
担当教科名	英語
実践教科名	総合的な学習の時間
時間数	35時間
対象生徒（学年）	高校2～3年生
対象人数	40名

関連する学習指導要領の内容と文言

高等学校学習指導要領第４款で、総合的な学習の時間の学習内容の例として、「国際理解…などの横断的・総合的な課題についての学習活動」や「自己の在り方生き方や進路について考察する学習活動」が挙げられている。

このような学習内容に関連し、本校では総合的な学習の時間において、国際理解・国際協力を通して自己の在り方について考察させることを目的とした一連の学習活動を行っており、私は研修後、今回の研修で得たことをこの一連の学習活動の中に組み込もうと努めてきた。

Ⅰ．実践の目的

はじめに、この本校独自の学習活動について紹介したい。

ビジネス実践

本校ではここ数年、総合的な学習の時間に行うすべての学習を「ビジネス実践」と称し、学校全体を総合商社に見立てて全校の生徒・職員が各課に分かれ、商品の開発・販売や地域への貢献活動などを行っている。４月から11月までに行ったビジネス実践による学習成果の発表の場はAKISHOP（アキショップ）と呼ばれ、毎年秋田拠点センター・アルヴェで開催されている。

国際協力課

このビジネス実践の校内組織の中に国際協力課という課がある。生徒40名と教員３名で構成されており、私もその担当教員の一人である。国際協力課では、次の三つの指導目標を設けて、様々な国際理解教育・国際協力活動を行ってきた。①世界の現状を理解し、自己の立場や環境を客観視（足元を見つめることが）できる学習活動の実施、②「世界の中の一人」という意識を育む学習活動の実施、③自己の可能性を探求できる学習活動の実施。

こうした学習活動を通して、生徒が世界の現状を知り、可能なことを実践することによって、結果的に自分の生活や自分自身を見つめ直すことが期待された。そのようにして、自分が今なすべきことが見つかり、それが自己実現や進路実現につながっていく可能性があるのではないかと考えた。

A-style

国際協力課では昨年来、特にアフリカ理解・アフリカ支援に重点を置いて活動してきた。アフリカについて一般市民の勉強会で発表したり、アフリカのマラウイ共和国にサッカーユニホームを送ったり、アフリカ支援について一般市民と意見交換を行うカフェをオープンさせたりした。このアフリカに関連した一連の学習・支援活動はA-styleと総称されている。

実践の目的と手段

今回の教師海外研修は、この国際協力課の活動の流れの中にある。私が研修国としてアフリカのガーナ共和国を希望したのも、A-styleがあったためである。私が研修で体験してきたものを通して、国際協力課の生徒たちがアフリカについての理解を深め、彼らが自分の足元を見つめなおす一助となってほしいと願い、研修後の活動に取り組んできた。

そのための手段として、ガーナに関するプレゼンテーション、ガーナで購入した物品の販売、ガーナ体験記を掲載した書籍の発行などを行った。そのような実践の詳細については、Ⅲの項目をご覧いただきたい。

Ⅱ．授業の構成案

国際協力課の活動の全体像をつかんでいただくために、以下に国際協力課の年間活動内容を掲載したい。

平成20年度　総合的な学習の時間　地域貢献部国際協力課 年間学習活動内容

月　日	時数	活動の名称	活動の概要
4月28日(月)	2	全校ガイダンス	生徒に募集をかけ、5月上旬に最終人員発表。世界の貧困についてのプレゼンを実施。
5月15日(木)	1	第1回 国際協力課会議	班長、副班長の決定。人員、年間活動計画の確認。JICA「世界の笑顔のために」プログラムの説明。本の出版に関して説明。
5月22日(木)	1	JICA出前講座①	【テーマ】「アフリカと感じよう」～日本から想いを馳せる～ 【講座名】第1回「世界の現状からアフリカへ」 【講　師】樋口和彦氏（JICA秋田デスク、国際協力推進員）
5月27日(火)		出前講座 in 港北小学校	小学生を対象とした比較的規模の大きな「世界が100人の村だったら」ワークショップ実施を手伝う。児童との交流も行う。 【参加生徒】　8名
5月29日(木)～ 6月5日(木)	2	「地域としての アフリカ」	班編制をし、ユニセフ「世界子供白書2007」の基礎データを用いて色分けをする。また、地図帳を使いアフリカ諸国を知る。
6月7日(土)		アフリカ学習会Ⅱ	【プレゼン内容】「サハラ以南のHIV・エイズ問題」（約30分） 【場　所】アルヴェ3階　市民交流サロン【参加生徒】　6名

月　日	時数	活動の名称	活動の概要
6月12日(木)	1	JICA出前講座②	【テーマ】「アフリカと感じよう」～日本から想いを馳せる～ 【講座名】第２回「エチオピアを考える」 【講　師】佐々木基了氏（秋田大学大学院）
6月19日(木)	1	JICA出前講座③	【テーマ】「アフリカと感じよう」～日本から想いを馳せる～ 【講座名】第３回「マラウイを考える」 【講　師】打矢佳彦氏（秋田市上下水道局）
7月3日(木)	1	マナー講習会	ビジネス実践本部主催の接客マナー講習に全員参加。
7月5日(土)		A･Aフェスタ 2008	秋田キャンパスネットなどが主催する国際理解イベントでブースを担当し、フェアトレード商品などを販売。 【場　所】秋田拠点センター・アルヴェ　【参加生徒】６名
7月17日(木)	1	生徒による プレゼン	「サハラ以南HIV・エイズ問題」について、国際協力課の代表生徒が同課の残りの生徒向けに発表を行う。
8月28日(木)	1	第２回 国際協力課会議	２学期の活動内容の確認。教師海外研修報告及び「カカオ豆はどこへ行く？」についての話。モザイク画案選定。
9月4日(木)	1	AKISHOPに 向けて	A-style Caféを含む販売活動等の内容と班編制。
9月11日(木)	1	JICA出前講座④	【講座名】「外からみた日本」～足元をみつめなおす～ 【講　師】斎藤　晋氏
9月18日(木)	1	講座⑤ ～環境の達人～ （秋田県事業）	【講座名】「気候変動とアフリカ関係」 【講　師】菊地格夫氏 （秋田県地球温暖化防止活動推進センター）
9月25日(木)	1	AKISHOPに 向けて	各班（書籍・ガーナお土産販売班、A-style Café 班、Fair Trade Shop班）で、AKISHOPでの活動内容を検討。
10月2日(木)～ 10月23日(木)	6	モザイク画作成	作成上の注意、方法の説明。モザイク画作成および班別学習。
10月26日(日)		NPO法人県国際 協力協議会 設立５周年記念 フォーラム	「誰でもできる国際協力」という全体テーマのもとに、A-styleについて発表。マラウイにサッカー用具を送った活動を紹介。 【場所】ルポールみずほ　【参加生徒】６名
11月6日(木)	2	準備	使用物品の運搬、モザイク画の展示、価格表の作成など。
11月7日(金)	8	AKISHOP	午前11時からフェアトレード商品、ガーナのお土産、本などを販売。午後４時からA-style Café 2008を開店し、６時からはヨルカイギとタイアップして発表やパネルディスカッションなどを行う。
11月10日(月)	2	片付けと反省	会計処理等。この時間帯にガーナについて発表。
11月13日(木)	2	最終報告会	全校生徒の前で各課がそれぞれの活動内容を報告。

月　日	時数	活動の名称	活動の概要
12月6日(土)		～世界に羽ばたく青年海外協力隊～ in 東北	青年海外協力隊応募促進キャンペーン（東北キャラバン隊）の記念イベントで『高校生のための国際協力入門』を販売。 【場　所】仙台国際センター　【参加生徒】5名
12月19日(金)		現地からの手紙	JICA「世界の笑顔のために」プログラムに協力してくれた港北小学校の児童たちに、支援先からの礼状を手渡す。
12月22日(月)～12月23日(火)		あきたホットほっとクリスマス	大学生が主催する地域活性化のためのイベントで、本やガーナの物品、フェアトレード商品などを販売。 【場　所】秋田市日赤跡地　【参加生徒】6名

Ⅲ．授業の詳細

特にガーナでの研修に関連した活動を、以下に紹介したい。

カカオ豆についての授業

実施日：8月28日(木)

対　象：国際協力課生徒

内　容：国際協力課の同僚の教員が「カカオ豆はどこへ行く？」という題でカカオ豆とチョコレートに関する話をした。生徒たちは、私がガーナから購入したチョコレートを食べながらその話を聞いた。チョコレートのルーツ、アフリカにおけるカカオ豆の国別生産量、加工貿易の実際、アフリカにおけるカカオ豆とチョコレートの生産量について説明がなされた。現地の子供たちはカカオ豆が何になるか分からない一方、先進国の私たちはチョコレートの原料が何であるか分かる人は意外に少ないという実態について、生徒たちに考えさせることを試みた。

本の発行

ここ数年、国際協力課が行ってきた活動やJICA国際協力出前講座の内容を紹介するとともに、元青年海外協力隊員や報道関係者らによる、地球規模の課題解決に向けた提言をまとめて、『高校生のための国際協力入門～世界を感じて、足元を見つめなおす』というタイトルで本を出版した。生徒たちが講座の内容を書き起こし、私がそれを編集した。生徒の文章も多数掲載されている。生徒とJICA関係者、そして教員の共同作業によってできあがったものである。

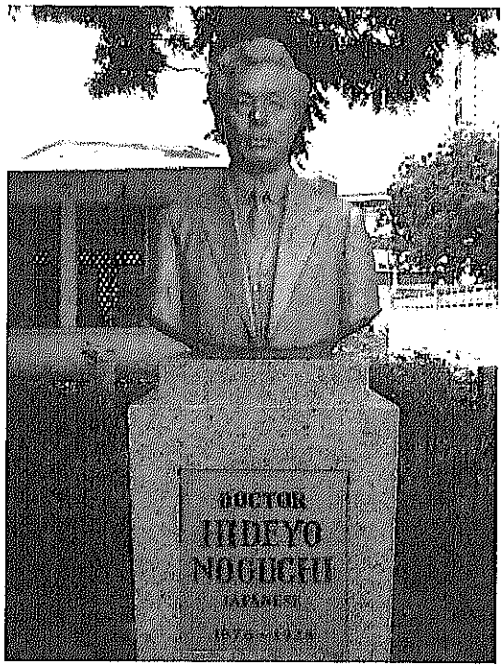
この本の中に、今回の教師海外研修に参加して得た感想を掲載した。以下に転載したい。

ガーナを訪れて

福島県の猪苗代湖畔にある野口英世の生家を訪れたことはありましたが、彼の終焉の地に足を踏み入れることになるとは思ってもみませんでした。

野口英世は今から八十年前、ガーナの首都アクラで亡くなりました。アクラ市内にあるコレブ病院で黄熱病に関する研究を続けている間、彼自身がこの病気に感染したと言われています。コレブ病院内には彼が当時使っていた研究室が残されていました。その奥にある一室には、彼の写真や母親から送られてきた手紙などが飾られていました。博士を記念する近くの庭園には、博士の信条である「忍耐」という文字が刻まれた石碑もありました。

日本では千円札の肖像にまでなっている野口英世ですが、ガーナでの知名度は高くないようでした。しかし、日本政府の無償援助で建設されたガーナ大学医学部附属野口記念医学研究所は、通称「ノグチ」として、ガーナ国民だけでなく世界中の大学や研究機関に広く知られていると聞きました。この研究所は現在、日本政府による技術協力の一環として実施されている「国際寄生虫対策西アフリカセンタープロジェクト」の拠点となっています。このプロジェクトは、西アフリカにおいて包括的な寄生虫対策のための人材養成機関としての役割を担うことを目標としています。



ガーナにある野口英世の胸像

この野口研究所を訪れた際にマラリアの感染過程について説明を受けました。現地に在住する方々の話も参考にすると次のように言えます。マラリアは、ハマダラカという熱帯地方に生息する蚊を通して人に感染します。蚊にもたくさんの種類がありますが、マラリアはこの特定の蚊を介さなければ感染しません。ハマダラカに刺されたとしても、その蚊が感染者から吸血してマラリア原虫という病原体を持っていなければ感染しません。さらに、感染したとしても、病原体を殺すほどその人の体内の抵抗力が強かったり、何回か罹患して免疫を持っていたり、あるいは初期段階で適切な治療を受けたりすれば、大事に至ることはそれほど多くないようです。

しかし、マラリアに対して抵抗力のない乳幼児の場合や、早期に適切な治療を受けることができなかった場合には、死に至ることがあります。ユニセフによると、全世界で毎年、百万人以上がマラリアで死亡しています。そのうち、アフリカの五歳未満の子供が占める割合は約八十パーセントです。つまり、約八十万人のアフリカの子供が毎年、マラリアで亡くなっています。

アフリカにおける子供の重大な死因となっているこの感染症を根絶することは、果たして可能でしょうか。世界のマラリア汚染地域のすべての人が、殺虫剤入りの蚊帳や蚊取り線香、蚊除けなどの手段によって、ハマダラカに刺されない努力を徹底すれば、マラリアを大きく減らすことは不可能ではないようです。そうするためには、世界各国による緊密な連携と協力が必要とされることは言うまでもありません。

アクラを離れて高原地帯に入った辺りでは、カカオ農園を視察することができました。カカオの花や、木の幹にぶら下がっているカカオの実を間近に見ることができました。実の中にある種子を発酵させ乾燥させたものをかじってみると、微かなチョコレートの味と香りがしました。日本国内に輸入されているカカオ豆の約七十パーセントがガーナ産だといいますが、そのカカオ豆が手間のかかる様々な工程を経てチョコレートの原料になるということが分かりました。

カカオ農園を訪れた後は、西アフリカ最大のマーケットのあるガーナ第二の都市クマシ、鉱山の町として知られているタークワ、かつて奴隷貿易の拠点となっていたエルミナやケープコーストといった海岸沿いの町を訪れました。今回の研修で回ったのは南部の比較的発展した地域のみで、貧しいと言われる北部には足を延ばしませんでした。

ガーナの人たちからは、行く先々で大きな歓迎を受けました。タークワの市長や通りすがりの村の首長が温かく歓迎してくれたほか、バティック（ろう染めの布）作りを実践している全寮制の女学校、理数教育の重点校となっている公立高等学校、キリスト教系の私立小中一貫校の生徒たちと触れ合うことができました。また、訪問先の家族は、グランナッツスープとフーフーという現地の食事で最高のおもてなしをしてくれました。

十日間という短い期間でしたが、それでも、ガーナの人々の暮らしぶりを垣間見ることができました。乾季には水が不足する、水道水がそのまま飲めない、時々停電するなど、日本に比べて生活は不便だとしても、人々は明るく力強く生きているという印象を受けました。生活の中に極度のストレスがないせいか自殺者がいない、挨拶をはじめとして礼節を大切にしている、誇り高いところがある、可能性や創造性は日本人と変わらない、というようなことを現地で活躍されている青年海外協力隊やシニア海外ボランティアの方々から聞きました。ガーナ人が持つ潜在能力の高さに関しては、クワメ・エンクルマ初代大統領やコフィ・アナン前国連事務総長といったガーナ出身者の業績からも推測することができます。

最後になりますが、今回の研修でお世話をしてくださったJICAガーナ事務所をはじめとするJICA関係機関の皆様、そして同行してくださった皆様に心から感謝いたします。

ガーナ物品の販売

実施日：11月7日(金)

場　所：アルヴェ１階及び秋田駅２階改札口付近

対　象：一般市民

内　容：AKISHOPの一環として、私がJICAガーナ事務所の階下にあるギフトショップなどから仕入れてきたものを国際協力課の生徒たちが販売した。販売した物の中には、シアバターから作られたクリームや石けん、青年海外協力隊が支援しているバティックショップから購入した布、クマシのカルチャーセンターから購入した木彫りの製品や、ガーナの特産物となっている機織りの布「ケンテ」などがある。販売による収益は今後、国際協力課の国際協力活動のために使う予定である。

ガーナの物品を販売する生徒たち

ガーナに関するプレゼンテーション①

実施日：11月7日(金)

場　所：アルヴェ２階

対　象：一般市民（ヨルカイギ参加者）

AKISHOP当日、A-style Café 2008との共催という形で開催された第34回「ヨルカイギ（市民活動入口講座）」で、ガーナ研修について発表を行った。国際協力への関心が高い方々ばかりで、熱心に話を聞いていただいた。枠内の文章は、私のこの発表について担当の方がまとめてくれたもので、同講座のウェブページに掲載されている。

この文章の中に、「資源を平等に分かち合っていけるような協力関係」という語句がある。様々な地球規模の課題に対処するには、各国に余分に存在する食糧や資源を国家間で公正に分配することが大事であると考えている。

途上国だけでなく先進国においても、解雇によって住居を失い、まともな生活ができなくなった人が増えてい

教師海外研修の報告をお話しくださった大堤先生。

ガーナでの10日間は、野口英世記念資料館、テマの漁港、カカオ農園の視察の他、バティック作りの支援、理数科教育支援、教員養成支援について学んできました。

その中で感じた事は、地球規模の課題が山積みだということ。富の偏在による貧困、地球温暖化、食品価格の高騰、エイズ・マラリア、水不足、世界金融危機…。

国同士が、資源を平等に分かち合っていけるような協力関係が必要と、切に感じたとのことです。

る。地球上のすべての人が満ち足りた生活を送るためには、お互いに気遣い、助け合わなければならない。そのような相互扶助を地球規模で実施しなければ、地球全体がもたないところまできていると思う。詳しくは『高校生のための国際協力入門』をご覧いただきたい。

ガーナに関するプレゼンテーション②

実施日：11月10日(月)

対　象：国際協力課生徒

AKISHOPの前は生徒も教員も多忙であったため、ガーナについて話をしたのはAKISHOPが終わってからだった。JICA教師海外研修のあらましを紹介したあと、黄熱病の現状、マラリアの予防、野口英世ゆかりの病院や研究所、現地の青年海外協力隊によるガーナへの貢献、カカオの生産・加工過程、現地の家庭での食生活などについて、写真を交えながら説明した。今まで国際協力出前講座を通して、世界の現状をある程度理解し国際協力を実践してきている生徒たちなので、熱心に聞いてくれた。

Ⅳ．実践の成果

今回の教師海外研修にかかわる私の実践は、年間35時間の「総合的な学習の時間」の枠の中で行われたため、私の実践だけを切り離して成果を挙げることは難しい。国際協力課の生徒たちが４月から11月までの一連の授業を振り返って書いた文章の中から、アフリカやガーナ物品の販売に関連したものを以下に掲載したい。

「自分の知らない世界の一つとして、飢えや貧しさに苦しむ人々がいる現実は、なかなか実感できなかったが、話を聞き、モザイク画を作成したり、ガーナの人がつくった物に触れたりするうちに、自分を見直すことができた。普通なら体験できない授業で、人の素晴らしさを感じた」（２年男子）

「４月の頃はガーナに対してあまり興味を持つことができませんでした。それが、出前講座でアフリカの話を聞くにつれて、イメージや興味がどんどん変化していって、いつの間にか、総学や出前講座で話を聞くことが楽しみになっていました。時には、自分が今している生活を恥じるときもありました。アフリカを体験することによって、僕自身も変わったことがたくさんあります。物を非常に大事にするようになりました。使える物はできるだけ最後まで使うようになりました。

AKISHOPのときも、木彫りの製品をすべて売ったのですが、利益目当てで売らず、ただ素直にアフリカの人々が生活したいからがんばって作った物です、と説明したら、多くの人たちが買ってくれました。今回のAKISHOPでは、アフリカに対して助けてやろうという気持ちを持ってくれた人が増えたのではないかと思いました」（２年男子）

「最初、国際協力について自分は一体何ができるのかと、ただ漠然としたものしかなかった。アフリカは貧しくて大変なところという印象だったが、授業を通し、生活は苦しくても自分たちと同じ感じの人がたくさんいることを知った。また、国際協力は身近なものであるし、もっと知られてもいいと思った。自分たちに何ができるかと言えば、募金など初歩的なことかもしれない。アフリカの現状を知り、今の自分の生活を見直す大きなきっかけになったと思う。今を一生懸命に生きることが一番大切だと思った。この授業で学んだことを生かし、これからも国際協力について考えていきたい」

（３年男子）

「日本の豊かさと自分のわがままを知ることができた。アフリカの国々の治安や経済、国民の生活ぶりなどを学んでいくうちに、日本がどれだけ安心で、安全で、裕福で、自分がどれだけ欲がたけていたのかがよく分かった。『あれ欲しい、これ欲しい』という、よく耳にする言葉は、アフリカにとってどれ程、遠いセリフなのか分かった。物を選ぶ余裕もなく、ある物にすがって生きていかなければならないアフリカの過酷さと、それにめげずに常に明るく生きる人間性の素晴らしさを感じた。

今回の授業を通して、自分がどれだけ幸せで、裕福で、わがままなのか知ることができ、よかった。今後は、少しでも我慢する心や、節約する心がけを大切にし、一日一日の幸せをかみしめて生きていきたい」（2年男子）

なお、ここ数年の国際協力課の活動が認められ、秋田商業高校は平成20年10月、財団法人国際教育交流馬場財団より、国際理解教育研究・実践奨励のための「馬場賞」を受賞した。

また、今年度のA-styleについては国際開発ジャーナル社による取材を受け、その内容は『JICA's World』2009年1月号に掲載された。

本校ビジネス実践・国際協力課が編者となって発行された『高校生のための国際協力入門』は、全国の大手書店のほか、アマゾンなどのオンライン書店からも購入可能である。この本のことは、地元の新聞でも何回か取り上げられている。以下に紹介するのは、秋田魁新報の読書欄に掲載された記事である（秋田魁新報社提供）。

2008年(平成20年)11月9日　日曜日　(12)

秋田ゆかりの本

授業通じ自問、「形」に

「高校生のための国際協力入門」

秋田商業高校ビジネス実践・国際協力課編著

飢えや貧しさに苦しむ人が世界中にいる。その現実に対して、自分たちができることはないだろうか―。本書は、秋田商高の生徒と教師たちが数年間にわたってその問いを追求し、「自分にできる国際協力」を模索した記録である。

同校は総合学習の時間を「ビジネス実践」と称する。その時間は学校を「模擬株式会社」ととらえ、生徒や教員が約三十の課に分かれて商品開発や販売促進といったビジネス活動を学ぶ。本書にまとめられた国際協力もその一環。JICA（独立行政法人国際協力機構）東北支部と連携して行われた。

元青年海外協力隊員らを招いた講座で世界の現実を知った生徒たちは、自らの暮らしを省みながら「このままでいいの？」「何ができることは？」と自問する。それはやがて▽文具やスポーツ用品を募って途上国の子どもたちに送る▽イベントを開いて多くの市民に世界の現状を伝える▽貧困を断ち切るために必要な制度を提案する―といった「形」を成していく。

「人を助けるとは、相手のことを考える、大切に思うことから始まると思う」

「本当は何がアフリカの人々のためになるのだろうか」。生徒の一人はこう問い掛ける。きっかけは授業。

しかしその枠を超え、生徒たちは自ら「できること」を考え始めた。

世界の現状に危機感はあるけれど実際に何をしたらいいか分からない、という人に読んでほしい一冊。本の販売による収益は、生徒たちの国際協力活動に活用される。

（アルテ・一六八〇円）

Ⅴ. 課題

世界同時不況により日本の多くの企業の業績が悪化し、高校への求人数が急減するなど、身近なところにまで影響が及んでいる。国際協力課の担当教員の一人として、来年度はもっと国際協力課としての活動の幅を広げ、世界的な経済危機や富の偏在の問題、地球温暖化など、世界の現実の問題に可能な限り対応していきたいと考えている。

地球規模の課題を解決するためには地球規模の組織をもって対処すべきだという考えから、ユニセフやユネスコなどの国連機関との協力も視野に入れていきたい。日本からの途上国への公的支援、つまりJICAによる二国間協力は、なくてはならない非常に重要なものであるが、経済面で世界情勢が緊迫している現在、二国間協力に限らず、全世界の先進国と途上国が一体となった包括的な多国間協力が必要とされていると思う。そのような多国間協力にとって、各国政府を代表する公的な機関である国連の存在は極めて重要である。

あくまでも担当教員の一人としての考えであるが、本校国際協力課は、これまで通りの活動を行って自己満足するのではなく、グローバルな問題を解決するために実際に役に立つことは何かを模索し、そのようにして発見したことを積極的に実践し、発信していきたいと考えている。公正で持続可能な社会の構築を目指し、JICA東北との連携を元にして持続発展教育（ESD）に積極的に取り組んでいきたい。

Ⅵ. 出典

秋田魁新報　2008年11月９日(日)付朝刊

市民活動センター「市民交流サロン」のウェブページ
(http://www.alve.jp/salon/event/yorukaigi/2011/yoru_2011.htm)
第34回　AL☆VE de ヨルカイギ 「A-style Café 2008 ～私たちにできる国際協力のかたち～」

秋田市立秋田商業高等学校 ビジネス実践・国際協力課編
『高校生のための国際協力入門~世界を感じて、足元を見つめなおす～』
(2008年、アルテ刊)

よりよい明日を、世界の人と。

独立行政法人 国際協力機構